



橋は流れて、水は流れず

和田 壽 弘(インド哲学)



名古屋大学でインド哲学研究室（旧インド文化学研究室）の教員を33年間勤め、愈々定年退職の時を迎えました。学生時代を含めると、途中インド留学が3年ありましたが、47年にわたって名古屋大学で勉学・教育・研究をしてきました。この間、自然科学分野での知見の進歩には目を見張りました。この結果、残念ながら、世の中では人文学の知見が不要のように思われる傾向が強くなりました。

かつて「月刊名大文学部」創刊に際して、人文学は人間の本質を探究すると書きました。人文学の中にも様々な分野があって、それぞれが求める人間像は違っているでしょうし、本質も一つではないでしょう。「唯一のはず」という主張の有効性は揺らいでいますが、それを探究する気持ちは大なり小なり誰もが持っています。

「人はなぜ本質や真理を求めるのか」という問を立てると、結局は「自分とは何者か」「他者とは何か」という問に結びつきます。本質や真理をめぐって思弁を深めたり、議論したりすることの目標は何だろうかと考える時、名利を求めたりすることではなく、一喜一憂せず、求めるものを淡々と探求し、確実に多くの人に伝えることかなと思います。人文学は直ぐに役立ちそうには見えないかも知れませんが、それこそが人格形成に深く関わり、ふとした時に役立つものです。

「橋は流れて水は流れず」は中国南北朝時代の傅大士の詩にあり、禅語として好まれます。「橋上を歩めば、橋は流れず水は流れているはずである」という常識にとらわれず、淡々と探究心を持ち続けようと思います。グローバル化した世の中で起こっていることを知ることも、研究や人間の幅を広げてくれると信じています。淡々と為すべき事を為す、そういう生き方をしたいものです。

（写真は稲沢市矢合町の円光寺です。臨済宗妙心寺派の禅寺で、「菽の寺」と呼ばれています。）

分野・専門紹介—File60

頭に浮かんだ疑問を大切にしていくこと

分野・専門名：哲学

哲学では、何でも疑問に思っているのです。たとえば、「愛って何ですか？」と誰かに尋ねてみましょう。こんなこと、改まって他人に訊くのはなんだか気恥ずかしいと思う人もいるかも知れません。でも哲学では、そんなことこそ大真面目に尋ねていいのです。古代ギリシアの哲学者プラトンの『饗宴』では、立派なヒゲのオジさんたちが、酒を交えて気軽に、しかしとても真剣に、愛について、自分の考えをそれぞれ披露して語り合っています。

哲学の演習では、様々な哲学者のテキストを精読します。例として、『饗宴』の演習では、テキストを原典ギリシア語ないしは英語翻訳から日本語に訳し、その内容について



て質疑を交わしました。どんな小さな質問でも、先生達は決して軽く扱わずに丁寧に答えてくれます。学生が自分の研究を発表するセミナーでも、質疑応答の時間が多く取られています。発表者の皆さんは、受けた質問から多くを学びます。そのなかで生まれた疑問や新たな発想のおかげで、自分の研究の中で曖昧になってしまっている箇所や、間違っていて理解していた概念について気付き、思考を深めることが出来るからです。疑問を抱くという行為は、自分だけでなく相手のことも、一歩先へと進ませる力を持っているのです。

何にでも疑問を持つことは、生きていく上でも役に立ちます。どんな人でも、苦しい時期や人生の方向を見失うことがあるものです。生きていく中で何に躓いたのかきちんと調べなければ、また同じものに出会っても対処することが出来ません。哲学は、自分の認識のほころびに気付く力を養ってくれます。懐に忍ばせた哲学の精神は、人生の道を歩むあなたの足元を照らし、力になってくれるでしょう。

(執筆時 博士後期課程3年・山田 滯)

分野・専門紹介—File61

「外国人」から考える

分野・専門名：文化動態学

皆さんは日常生活のなかで外国人と触れ合うチャンスがたくさんあると思います。英会話の英語教師とか、コンビニで働く留学生などの外国人が多く日本に住んでいます。しかし「外国人」とは誰のことでしょう。単純な質問に見えますが、よくよく考えたら答えに詰まるかもしれません。「外国人の友達がほしい」としばしば聞きますね、その「外国人」は英語が話せるアメリカ人でしょうか、或いはスワヒリ語が話せるケニア人でしょうか。美容室で「外国人風のカラー」みたいな宣伝を見ますが、おそらくここでの「外国人」は黒髪の中国人、韓国人ではないと思います。国籍についてはどうですか？一般に日本国籍を持たない人が「外国人」とみなされますが、そうすると、日本で生まれ育ち、後から国籍を変更した人はもう「日本人」ではないでしょうか。2019年3月に日本国籍を放棄したアカデミー賞受賞者の辻和弘さんは「外国人」ですか？

「外国人は誰のことか」という質問は単純に見えますが、実は結構考えさせられますね。身近なことから

出発し、当たり前と思っていたことをもう一度考え直す能力、常識と呼ばれたものに対し「なるほど」よりも、「なぜ？」という聞き返す能力を養える場が、文化動態学ではないか、と私は思っています。本講座では「外国人」「移民」「ディアスポラ」「異民族」などに見なされたヒトの移動・越境を中心に、社会学、歴史学、文学人類学、政治学などの学際的なアプローチから世界を読み直しています。

ちなみに、わたしは中国からの「外国人」です。でもよく「日本人」と間違えられます。なぜでしょうね！
(博士後期課程3年・劉 罡)



最近の文学部

コロナウイルス と桜と…

先日、厳戒態勢の中、文学部では小グループに分かれ、卒業・修了証書が授与されました。ちらほら咲き始めた桜の下、元気でなやかな笑顔が見られました。安心して勉強し、働ける日が早く戻りますように。(YK)

*本紙では、名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが、それまで待てない人は…
名大文学部のWEBサイト <https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/> まで(『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります)